

2022年4月10日 午前礼拝
「みこころに近付いていく信仰」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】 Iヨハネ 3:11~18

- 18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。
- 19 それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。
- 20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。
- 21 愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、
- 22 また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。
- 23 神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。
- 24 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。

【説教要約】

これまでIヨハネの3章を見てきました。今日で3章はクライマックスになりますので、少し3章をおさらいしたいと思います。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

Iヨハネ3:2-3

3章は清い行ない、あるいは正しい行ないについて教えが書かれていました。行いと愛はセットであるという内容です。その出だしは、「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清く」するということです。

「この望み」とは、将来イエス様がクリスチャンを迎えにやって来て、私たちは直接イエス様とお会いし、いつまでもイエス様とともにいられるという望みです。「携挙」とか「空中再臨」と言われる出来事のことですね。

イエス様とお会いした時、私たちは今までより一層イエス様がどういってお方か知ることになります。そして、私たちの人格や心のかたちもイエス様に完全に似せられるというのです。

私たちに将来待っているのはこのことです。ですから私たちは、今は罪の世界にいて、不完全な者なのですが、確かな望みを持って生きることができるのです。

この望みを抱いて生きることが、クリスチャンのあらゆる良い行ないの動機になるのです（1-3節）。

そのようにイエス様を見上げ、イエス様に将来の希望を置いているので、まず「罪から離れたい」と願います。かつては罪と悪魔の奴隷でした。しかしイエス様に救われてからは、神の子どもにされたのです（4-10節）。

また、イエス様を愛することは世の中から憎まれることに繋がります。世の中は神様との関係を持っていないので、クリスチャンが神様と持っている親しい関係に嫉妬するのです。そのように世から憎まれても、クリスチャンは逆に兄弟を愛するのです。なぜなら、イエス様が自分のためにいのちを捨ててくださったと知っているからです（11-16節）。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

Iヨハネ3：16

ですから、私たちも同じように愛していきましょう（17-18節）。

このようなクリスチャンの生き方、そして戦いについて、前回まで見てきました。

今日は、その続きにして3章の最後です。私たちがイエス様の愛を実践したなら、どこに導かれるのかが書いてあります。

①平安のありがた

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。

たとえ自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。

Iヨハネ3：18-20

ここには、神様が与えて下さる「平安」について書かれています。愛を実践したなら、平安をいただけると言っています。驚くことに、神様が下さる平安は、どんな状況でもいただくことができるのです。

普通、平安や心の安らぎといえばどんな状況を想像するでしょうか。一人の時間を過ごしている時やぐっすり眠っている時、あるいは親しい人と一緒にいる時などが考えられるでしょうか。

しかし、この世の平安は限定的です。安らぎを得たと思っても、また状況が変わると失ってしまいます。また、人の心にはこの世の安らぎでは決して埋められない深い部分があると聖書は言います。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出します。」

ヨハネ 4 : 13-14

イエス様はこの時、心の満足を渇きの度合いで表現されました。何かで心を潤してもまた渇く。ひどい渇きを覚えてまた水を探す。この世での人の魂は渇いているのです。

本当に渇きを癒せるのは、イエス様が与える水だけだと言われています。これは、イエス様を信じた人に与えられる聖霊のことです。

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてください。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

ヨハネ 14 : 26-27

イエス様が下さる平安、聖霊こそ私たちの心のどんなに深い部分も潤す心の水なのです。

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真理をもって愛そうではありませんか。

それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。

たとえ自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。

I ヨハネ 3 : 18-20

どうして、愛を実践している時に平安をいただくのでしょうか。

理由が二つ書いてあります。

一つ目は「自分が真理に属するものであることを知」るからです。もし状況に関係なく、イエス様からいただいた愛を覚えて、自分も愛を実践しているとすれば、それは聖霊が自分に働いて愛の中を歩ませてくださっているのです。状況が、愛せない時であるほど、その平安は強くなります。

普通なら、状況が悪ければ悪いほど平安とは程遠いはずですが、御霊が働かれると不思議なことにどんな時でも平安をいただけるのです。

もう一つの理由は、神様が知っていてくださるからです。20節には「たとい自分の心が責めても」と書いてあります。これは、「有罪宣告をする」という意味です。自分の心が自分を有罪だと宣言するということです。

どういことでしょうか。私たちの心の中を一番よく知っているのは、私たち自身なので、私たちの悪い部分を自分の心が責めるということなのです。

「愛の量が足りない。そんなのは愛せている内に入らない」とか、「愛を行っていても、罪も犯しているじゃないか」とか、「今は愛していても、次は愛せないだろう」とか。神様の愛に真面目に取り組もうとすればするほど、自分の不十分さやイエス様との違いが見えるので責めてしまう時があるということなのです。

しかし、たとえ自分の心が自分の不十分さを責めたとしても、神様が下さる平安には関係ないことです。なぜなら、実践している愛がイエス様から来ていることを、他ならぬ神様が知っていてくださるからです。

私たちの平安は、自分の心が満足することとは少し違います。平安は、自分で満たすことではなく、神様が与えて下さるものだからです。

「神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです」(20節)。

ここに秘訣があります。自分の心が自分を責めたとしても、神様は私たちより憐れみ深いお方です。そして、自分の愛がどこから来ているか誰よりもご存知です。自分の心の声より、神様の評価に自分をお委ねした時、私たちは平安の中にいることができます。

ですから、自分の心が自分を責めた時、このように言えるかどうか確認してみてください。「私は、イエス様が私を愛してくださったので、私も兄弟を愛しています」と。もしこの言葉が真実なら、あとは神様にお委ねしてください。

逆にこの言葉が言えない状況なら、私たちはイエス様の愛ではないものを見つめているかもしれません。イエス様が私のためにいのちを捨ててくださった、あの愛に立ち返る必要があります。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

Iヨハネ 1:9

イエス様と繋がっているところに、平安があります。そして、イエス様に愛されているから、兄弟を愛する道に戻れるのです。

②みこころに近付いていく信仰

愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。

Iヨハネ3：21-22

次に、自分の心が責めなかった時についてです。ここにも、すごい約束が書かれています。

それは、神様との本当に自由な、喜びの交わりができるということです。神様はクリスチャンと、自由な交わりを持ちたいと願っておられます。しかし、私たちには罪があるので、私たちの方から神様に壁を作ってしまう場合があります。神様からの愛は何も変わりませんが、「自分の心が自分を責める」時、自分の側に未解決の心の問題があるので、神様と垣根なく喜ぶ交わりが難しくなってしまうのです。

しかし、そのような壁が何一つない時、私たちは喜びと平安だけの交わりを得ることができます。それは心の一つ一つの壁を神様に委ね、神様を完全に信頼している状態です。そのとき約束されているのは、その時、「求めるものは何でも神からいただくことができ」ということです。しかしながら、神様はこのような心の状態にならなければ、祈ったものを下さらないということではありません。

イエス様は願い事について、このように言われたことがあります。

あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますでしょう。

マタイ7：9-11

親は自分の子どもに良いものを上げます。神様は私たちの本当のお父様だから、なおさらのこと良いものをくださるということです。しかし、子どもが父を信頼していなかったらどうなるでしょう。父はパンを上げたいと思っているのに、子どもが「お父さんは良いものなんかくれない」と思っていたら、父に求めることはしません。また、良いものを見極められない幼子が願っても、そのまま叶えられることはありません。小さい子がかっこいいのでナイフを欲しがっても、危ないから渡さないのと同じです。

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。

マタイ5：43-45

私たちも、また唯一の神様を知らない人にも神様はいつも恵みを与えて下さっています。しかし、神様がどれほどの愛ですべての人を愛し、私たちを愛し、そのためにどのようなご計画を持っておられるのか私たちは分かりません。神様を知らない人はもっと知りません。

神様はどのようなお方なのか、何が本当にみこころなのか、何が良いものなのか見極めることができないからです。しかし、地上で生きる限り、神様御自身が、神様がどのようなお方で、何を望んでおられるのか、クリスチャンはその霊的な目を育ててもらっています。

最後に私たちが導かれるのは、このIヨハネの箇所に出てくるような状態です。「神様は良い物しか下さらない」という信頼を持ち、何が良い物であるか分かっている状態です。願い事がいつも、神様のご計画や望みに沿っている状態です。それは神様のことを知っている状態です。

祈りの代表例として、主の祈りがあります。私たちが礼拝でささげるこの祈りの最初の数節はこうです。

『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。
御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。
マタイ 6 : 9-10

神様がほめたたえられること。神様の支配があることを最初に願うのです。なぜかといえば、私の願いよりも、神様のみこころの方が優っていると認めているからです。しかし、この祈りに行きつくまでは大変です。このような祈りをしたイエス様は、「みこころがなるように」と祈って、十字架にかかったのです。

私たちも、「みこころがなるように」と祈っていく道の先は、イエス様のように完全に他者を愛し、自分を犠牲にする道です。それを望むことができる心は、神様と多くの格闘をし、神様が本当に信頼できるお方だと知った時に完成します。

心からの願いがいつも、神様のみこころにかなう。こんなに素晴らしいことはありません。この段階に行きつくために必要なことは、いつも自分の罪を悔い改め、神を信頼し続けることです。

③ イエス様に留まるということ

神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。

神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るので。

Iヨハネ 3 : 23-24

このように、Iヨハネ3章は、これから私たちが通る成長の道なのです。そのスタートは、イエス様が自分を愛しておられることを知ることです。その次は、イエス様と同じように、人を愛することです。

その中で私たちは24節の内容を実感していくのです。「神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます」。

イエス様は言いました。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

ヨハネ 15 : 4-5

イエス様という木に、私たちは留まる必要があります。留まっているなら、どんなに自分の心が自分を責めたとしても、本当にイエス様の中にいるので平安があります。イエス様に留まる道は、Iヨハネ3:23「御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合う」ことです。

これだけで十分なのです。そして、留まっているなら、木であるイエス様から栄養をもらって、枝の私たちは成長し、やがて実がつきます。実とは、神様の御栄光が現わされた証拠のことです。イエス様に留まるなら、必ず成長し、必ず神様は御栄光を現してください。今週、皆さんが実践できる愛はありますか？イエス様の愛を土台に、この道を歩みましょう。

最後に暗証聖句をします。

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

Iヨハネ 4 : 7-10